



会報第11号

発行所 立校会
栃木県高等学校農業窓行人集部
岡農業窓行人集部
真同 同 同
同 同 同
同 同 同

記念事業の願い



昭和三年卒
同窓会長
大倉 一郎

同窓会の事業につきまして、何処と学校当局、PTAの関係者から、多大の御協力をいただき、誠にありがとうございます。

明治四十四年四月、本県、特に芳賀郡市の農村指導者の育成を、目標として誕生した真岡農業高校は、いよいよあと一年にして、創立八十周年を迎えることになりました。

この記念すべき節目に当たり、何等かの記念事業を計画してはとの声が高まりましたので、昭和五十九年五月二十五日、本会と学校、PTA合同の発起人会が開催され、八十周年記念事業実行委員会が結成されました。

歴史と、伝統に生きぬいた、創立以来八十年を回顧し、先人の偉業を偲ぶと共に、将来に向かって、国家社会の求める社会人、産業人の育成に尽くしたい念願から、皆さん御案内の通り、総額八百円の予算により、本会の基金、PTAの協力費、ほか篤志寄付等をもって、創立八十周年記念事業として、記念式典、庭園の整備、記念誌発行、同窓会員名簿の発行につき、物心両面に亘って、会員の皆さんには、特段のご支援をいただいているところであり、誠にありがとうございます。

これに、会員各位の母校愛の発露でありまして、心から感謝申し上げる次第であります。かように記念事業が、一万一千有余名の同窓会の皆さんと、PTA、学校当局の熱誠溢れる動向にたいし、県当局

本校の教育に思う



岡 本 茂

本校が明治四十一年四月に、この声をあげてより今日まで、幾多の変遷を経て、風雪に耐えながら、八十年の長きに成長し、大地に深く根を張り、揺らぎない雄姿は誠に喜ばしいことである。

ご承知の如く、殆どの樹木には年輪があつて、この年輪は何の変遷もないように見えても、よく観察すると、同心円的ではあります。必らずしも同じ様相はしめしていないことに気が付きます。即ち、成長諸条件の良かつた年は、目づまりになっているものです。年輪がその樹木の歴史を物語る。継者のみではないといふことが入をはかった。

「近代化農業は機械から」のかけ声で三十年後半には待望のヘリコプター病虫害防除が実施された。「機械科産業は農地基盤の整理より」と、四十年より大規模な鬼怒川左岸土地改良事業が大先輩田上昇理事長を委員長として、十年の歳月を要し完了を見た。

「農業の発展と経済の豊かさの要因は農地の改革であり、また農協法ができて農協活動が盛んになったからである。生産の拡大と生活改善を図るために改良制度ができた三十年頃より研究クラブをつくり普及員の指導を受け発展した。初代協議長は先輩の塚田清典氏であった。大先輩上野千重郎初代町長の指導のもと「考える農業」へと転換をみた。澱粉食一辺倒から欧米型食生活に変化することをふまえて、畜産果樹にまいりちごなどの導入をはかった。

「近代化農業は機械から」のかけ声で三十年後半には待望のヘリコプター病虫害防除が実施された。「機械科産業は農地基盤の整理より」と、四十年より大規模な鬼怒川左岸土地改良事業が大先輩田上昇理事長を委員長として、十年の歳月を要し完了を見た。

「農業の発展と経済の豊かさの要因は農地の改革であり、また農協法ができて農協活動が盛んになったからである。生産の拡大と生活改善を図るために改良制度ができた三十年頃より研究クラブをつくり普及員の指導を受け発展した。初代協議長は先輩の塚田清典氏であった。大先輩上野千重郎初代町長の指導のもと「考える農業」へと転換をみた。澱粉食一辺倒から欧米型食生活に変化することをふまえて、畜産果樹にまいりちごなどの導入をはかった。

農業今昔



同窓会副会長
小倉 信義

創立八十周年記念で発行された同窓会員名簿が届いた。頁をめくれば学び舎の移り変わり、思い出の深い報徳寮での生活、実習農場で顔に汗しの開墾、炎天下のちよ麻の剥皮、田植作業、収穫の米俵を重ねて喜ぶ級友達。当時を思い懐かしく拝見する。農業今昔が一目でわかる写真集である。二宮尊徳先生の報徳の教えを学び、あしたに、将来に向かって若い青春の血を燃やしたものであった。

農業を天職と選んでもう半世紀、其の間さまざまな事があつたが全力を傾ける事が出来た喜びを幸せと感じている。敗戦前後の食糧不足は言語

「近代化農業は機械から」のかけ声で三十年後半には待望のヘリコプター病虫害防除が実施された。「機械科産業は農地基盤の整理より」と、四十年より大規模な鬼怒川左岸土地改良事業が大先輩田上昇理事長を委員長として、十年の歳月を要し完了を見た。

「農業の発展と経済の豊かさの要因は農地の改革であり、また農協法ができて農協活動が盛んになったからである。生産の拡大と生活改善を図るために改良制度ができた三十年頃より研究クラブをつくり普及員の指導を受け発展した。初代協議長は先輩の塚田清典氏であった。大先輩上野千重郎初代町長の指導のもと「考える農業」へと転換をみた。澱粉食一辺倒から欧米型食生活に変化することをふまえて、畜産果樹にまいりちごなどの導入をはかった。

「近代化農業は機械から」のかけ声で三十年後半には待望のヘリコプター病虫害防除が実施された。「機械科産業は農地基盤の整理より」と、四十年より大規模な鬼怒川左岸土地改良事業が大先輩田上昇理事長を委員長として、十年の歳月を要し完了を見た。

「農業の発展と経済の豊かさの要因は農地の改革であり、また農協法ができて農協活動が盛んになったからである。生産の拡大と生活改善を図るために改良制度ができた三十年頃より研究クラブをつくり普及員の指導を受け発展した。初代協議長は先輩の塚田清典氏であった。大先輩上野千重郎初代町長の指導のもと「考える農業」へと転換をみた。澱粉食一辺倒から欧米型食生活に変化することをふまえて、畜産果樹にまいりちごなどの導入をはかった。

「近代化農業は機械から」のかけ声で三十年後半には待望のヘリコプター病虫害防除が実施された。「機械科産業は農地基盤の整理より」と、四十年より大規模な鬼怒川左岸土地改良事業が大先輩田上昇理事長を委員長として、十年の歳月を要し完了を見た。



母校に感謝

昭和二十八年卒
同窓会監事 井 野 博

昭和二十八年は凶作の年であつた。三月に卒業した私は農家の後継者として、少しの抵抗感もなく家業についた。その頃の親達は、家業に専念できる子弟を教育する農業高校を本当にありがたうと思つていたのである。そして正に食糧増産の時代であり、今にして思うとき、働く事に張りあひがあつて意欲的な世情であつた。

それから三十年余の歳月は流れて、私もすでに五十路を越えて、この間とされることなく、母校との縁がほどよく続いて、お陰様で私の一家に沢山の豊かさを与えて下さり、ありがたい事だと感謝の念で一杯である。思えば昭和三十一年代に入ってから、農家の嫁不足減少のはしりが見られ、その様な情勢の中で完全に家

の重みにしはられた姿ではあるが結婚する。やがて三人の子供の中、長男が本校に入學して、我が家は親子三代六人の卒業生を数える。この事より母校との縁に更に深めたと思つてゐる。長男は本校を經由して宇大農学部三年生、これからどんな時代が来ようとも、私共の後継者であり、家族の期待にこたえてくれるものと信じてゐる。

老母が孫達の成長を満足しながら、将来の家のあり方を心配するが、誰彼を問わず、どの農家も現状は早晩の差があるだけで、共通の深刻な悩みを内包しているはずである。私も時代認識はしているつもりであるが、これから後とりの配偶者の選び方によって一家の進路や家庭経営が大きく変わることもなるが、今私

支部だより

真農同窓会大内支部
有志懇談会について



昭和十三年卒
大内支部長 大塚 克 己

去る四月十三日、昭和十年卒から昭和二十四年卒までの旧制真岡農学校卒業生を対象として、支部会を実施いたしましたのでその概要を報告いたします。

会場は田町の真川割烹店に設営いたしました。会員出席三十五名、来賓として本会より大倉一郎同窓会長、校長岡本茂先生、同窓会担当菅谷善六先生の御臨席を頂き、盛会裡に開催出来ましたことは発

起人一同の喜びとするところであります。

今回は特に支部会員で第三十二回卒業の菊地恒三郎氏の真岡市長二期目無投票当選と第三十五回卒業の小坂利雄氏の栃木県農協共済組合連合会会長就任祝賀を兼ねての催しでありましたし、時折りしも満開の花見気分と相和して開会 頭空和気会場に満ち溢れる状況を呈しました。

集合した会員も多士済済で

的指導者として共に汗を流し合った仲間でありましたから、に終了することが出来たので、次回ももっと層を広げようと計り知れない宴会となり真農出身であることの誇りと幸せを噛み締める一時を過ごすことが出来ました。

母校の思い出



昭和十六年卒
田野支部 広田 源 太 郎

昭和十四年四月より昭和十六年十二月の繰上げ卒業まで、母校八幡ヶ丘の学び舎に多感なる青春と情熱を打込んで土に生きたいを求めたことが、今更には郷愁の思い出として脳裏を走りまわります。その後、めまぐるしい時代の変遷により、農業に対する理念もその頃と今とは大変な変化がございします。その当時は全く農本主義で貫かれて居り、わが母校の報徳寮生活はその最もたるものであつたと思われまふ。今その報徳寮生活を顧みますと、三年生は全寮生活で生活即教育の実践教育でありました。早朝起床し朝礼、東天に向かつて「弥栄！」三唱し、それから「父母の根元は天地の命令にあり」から始まる報徳訓の唱和、体操各目の分担作業で生活が始まります。炊事当番が作った食事は「箸とらば天地の御恵み」と親とのご恩味をわねと食事訓を唱え、感謝してからの楽しい一ときでした。又付近は原野であり、夏休みを返上して炎天下に一鉢一鉢開墾した汗と足あとが思い出されます。私達の母校教育はこうした一貫した農本主義で貫かれた報徳教育でありました。が、今は農業をとりまく環境も大きく

母校の思い出



昭和二十二年卒
益子支部 加藤 博

私達の入学したのは現在工業高校のある八幡ヶ丘に県立真岡農学校としてあつた頃で、正に軍国色一色に包まれ「欲丁度太平洋戦争の末期で敗色濃くなった昭和十九年四月に入学し、二十一年の卒業でした。二年生になった昭和二十年は四月から七月まで一学期間始と授業もなく開墾に不足してゐて、それはそれ精を出し当時はブルドーザーなどなく唐鍬で手労働、汗を流して山を畑にしてさつまいもを植えたのが思い出されます。

昭和二十年八月十五日あの落着いて勉強も出来なかつたのを記憶しております。実習の合間に学校教練も厳しくしがりません勝つまでは」の合言葉のもとに頑張つたもの入学し、二十一年の卒業でした。二年生になった昭和二十年は四月から七月まで一学期間始と授業もなく開墾に不足してゐて、それはそれ精を出し当時はブルドーザーなどなく唐鍬で手労働、汗を流して山を畑にしてさつまいもを植えたのが思い出されます。

昭和二十年八月十五日あの落着いて勉強も出来なかつたのを記憶しております。実習の合間に学校教練も厳しくしがりません勝つまでは」の合言葉のもとに頑張つたもの入学し、二十一年の卒業でした。二年生になった昭和二十年は四月から七月まで一学期間始と授業もなく開墾に不足してゐて、それはそれ精を出し当時はブルドーザーなどなく唐鍬で手労働、汗を流して山を畑にしてさつまいもを植えたのが思い出されます。

私の歩み



昭和二十七年卒
山前支部 橋本 寛 治

「私の人生観」こんな原稿の長男でもあるので農業高校に進学したように思う。その観などあつたらうか。無我夢中の五十三年であつたような気がする。人生観を書くには早すぎるが、今までの私の歩んで来た養豚と政治への歩みなどを綴つてみたいと思う。

私は父が農業団体に勤め、母が留守を守る兼業農家の二男七女の六番目、長男として生まれた。両親に幼い頃から立派な人になることは一生懸命勉強すること教えられたものである。しつこききびしだった。しかし、私は遊ぶことが好きで勉強に身が入らなかったやうで、何度か遊び過ぎて家の中に入れてもらえなかつたことを思い出す。小学校六年の夏終戦を迎え、農家



活動報告

生徒会活動を振り返って

顧問 矢口 敏信

月日の過ぎるのは早いもので、慣れない初めての生徒会の顧問を引き受けて一年が経過しようとしている。

充実した内容のある各種行事の開催と、一般会員の生徒会活動への自主的な参加意識を高めていく目標に向かって、長谷川会長をはじめ役員が一致団結し、意欲的に取り組んでくれた。

球技大会や体育祭の体育的行事は、例年になく盛り上がりを見せ、随所に若さとエネルギーがいかに発揮された。授業中にはほとんど見られなかった真剣な表情が、心から拍手を送ったり、生徒の意外性を発見できるのもこんな時である。

先生方も、積極的に競争や応援に参加されて競技を盛り上げてくれた。

学校祭は非公開であったが、来年度の記念すべき創立八十周年のリハーサルを兼ねて十一月六日・八日に開催された。

農業クラブの今年を振り返って

顧問 小林 浩行

本校は日本学校農業クラブ県連盟の事務局校として今年二年目を迎え、本校農業クラブは、この一年間積極的に活動を行ってきた。

県連盟代表の岡本校長先生をはじめ、事務局長の野沢先生、農務顧問の先生方、農務役員の生徒一同が力を合わせ、リーダーシップを発揮して、県連盟の運営に、また校内の活動、運営にとり組

その間には、色々と大変な事も数多くありましたが、役員の生徒達にとり得る事が多く、生徒自身の成長に、大きく寄与したものと、確信しております。このような大役をこなしながらも、本年度も本校の農業クラブ員の活躍はめざましいものがありました。その一例として次に農務の

「健康と生活」というテーマのもとに従来のなかったクラス発表も取り入れ、全員参加の手作りの学校祭でもあった。

第一部の式典は、琴演奏にはじまり、記念講演は、県立博物館の尾島利雄先生の「生活と健康」という学校祭にふさわしくわかりやすい有意義な内容であった。

第二部の前夜祭では、吹奏楽部の素晴らしい演奏に耳を傾け、生徒・教職員有志によるバンドえんそう、歌に拍手かっさいで、ムードが盛り上がり学校祭にふさわしい幕あけとなった。

品評会に出展された野菜や穀物類、約三〇品は、即売せずに行方不明の発表で、市内の児童福祉施設「大楽園」に寄付したが、園長先生や園児達にとり喜ばれた。

今年度は、残された行事は予せん会だけとなったが、伝統を受け継ぎ、新生徒会を中心に生徒会の発展に大いに頑張ってもらいたい。

家庭クラブ活動について

大谷 恵美子

よく「家庭クラブって何をしているの？」と聞かれます。生徒会や農業クラブのように生徒全員が集まりいろいろな行事に参加したりしてはいないからだと思います。

家庭クラブの本当の意味は華々しい行事を行うことではなく、あくまでも周りの人思いやりの心を持ち奉仕の精神で活動するところにあると思います。

主な活動を挙げてみますと、五月と九月の花いっぱい運動、六月、九月、十二月のクリーン運動、六月の施設訪問、年間を通して行っているおしほり運動など、そして、夏休み中に毎年行っている、保育実習があります。

これは、西真岡保育園の一日保育として勉強に行きます。しもつかれ」その二つで、最も優秀賞に輝きました。奈良県で開催された全国大会では、全国九ブロックの代表だけに、どの部門でも粒ぞろいで、優秀な成績がたいものばかりでした。プロジェクトCで、惜しい最優秀賞に輝いたけれども、優秀賞に輝き、農業鑑定競技の部でも、農業コースの三年一組の田村君、食糧コースで三年四組の森君が、みごとに優秀賞を得ることができ、関東に真農校ありの印象を多くの人達に与えた。

今の農業に思う

昭和二十七年卒 祖母井支部 古谷 実

高度成長という時代の波に乗って、昔の農業から大きな脱皮を見せ、技術、共に向上した今の農業、国の食糧を補うという政策の下に、書を部門を通じて発達した農業、その裏には、家畜が農業機械に変わり、家畜のいない農業は地力を使い、土は野菜作りも忘れ、農家が野菜を育てるのも恥じない今日この頃である。

国の政策による稲作への圧力は、水田再編対策という格好の題の下に生産調整を強化し、総ての作物に農産物に魅力を与えることのない現代農業の中に、果たして我々農業者は何を求め、どう対処するか、大変むずかしいものを感じてのりである。日本は「豊

草原瑞穂の国、黄金の波にゆらぐ国」と教え込まれて来たのに、農に生きる者にとりて、「暗黒模索」と言う言葉の意味を痛感せずにはいられぬ思いがするわけである。

しかし圧力や壁に、とまどいを見せるわけには行かない。これに打ち勝ち、荒波を乗り越えて行ける農業を目指す。大変むずかしい事だと思うが、農業と言う本来の姿を求めてこそ、ふたたび脱皮した新時代の農業かも知れない。

経営は自分が行うもの、自分の手のうちにあるもの、まづ足もとから見直し、穀類もしくは青果物、自分の生まれ育った地域での適地適作、品質向上、産地拡大を目指す。

私達は、この実習で学んだことを、「高校生ふれ合い活動体験発表」というついでに参加し発表してきました。この発表で、私は三位に入賞しました。

私達家庭クラブ役員は、これからのような活動に積極的に参加し、頑張っていきたいと思っています。

母校の思い出

昭和三十一年卒 山前支部 川上 幹子

私も農家に嫁いで二十五年になります。農家に嫁いで良かったと思ひます。

毎日農業記録

昭和四十七年卒 篠崎 ヨシ

現在の私は、キュウリ栽培一丁付きハウスを建てた。わが家は宇都宮市内のスーパーとキュウリの契約栽培をしている。値段は第二で、第一は需要と供給のバランス、品質のよいキュウリを出荷することになる。新鮮な野菜は、たとえ形が悪くても消費者は喜んでくれる。

最近、私は、雀宮地区の「生活改善クラブ」の会長になり、仲間集めに走り回った。自分の意見を一人一人に話し相手の意見も聞いた。そこで分かったのはだれもが「友だちがいたらいいなあ」と思っていたことであつた。良かった仲間こそ私にとっては大変参考になった。これからの農業経営は、生産技術はもちろん、農業日誌や農業簿記をつけることが重要視され、六十年から記録が義務付けられた。私もどんぶり勘定に気付いて驚いた。初めてやった棚卸しの在庫調べ、減価償却費の計算、耐用年数以上に使う機械のよき、肥料、農薬、……もつと帳面と在庫をにらめっこし無駄遣いをやめ、物を大切に遣うことで、専業農家も生活が向上すると痛感した。

生活の根本は生きること、食糧に立って日本の農業をもう一度見直してほしい。減反で農家も勉強しないと荒地をもつことになる。私は農地を守る信念はいつまでも持ち続けたいと思つてゐる。私のこれからの課題は①安定したキュウリ栽培経営への努力、②脳卒中の死亡率日本一の汚名返上のための実践活動、③常に学ぶ心を失わないこと。

専業農家に嫁いで

昭和四十七年卒 篠崎 ヨシ

現在の私は、キュウリ栽培一丁付きハウスを建てた。わが家は宇都宮市内のスーパーとキュウリの契約栽培をしている。値段は第二で、第一は需要と供給のバランス、品質のよいキュウリを出荷することになる。新鮮な野菜は、たとえ形が悪くても消費者は喜んでくれる。

最近、私は、雀宮地区の「生活改善クラブ」の会長になり、仲間集めに走り回った。自分の意見を一人一人に話し相手の意見も聞いた。そこで分かったのはだれもが「友だちがいたらいいなあ」と思っていたことであつた。良かった仲間こそ私にとっては大変参考になった。これからの農業経営は、生産技術はもちろん、農業日誌や農業簿記をつけることが重要視され、六十年から記録が義務付けられた。私もどんぶり勘定に気付いて驚いた。初めてやった棚卸しの在庫調べ、減価償却費の計算、耐用年数以上に使う機械のよき、肥料、農薬、……もつと帳面と在庫をにらめっこし無駄遣いをやめ、物を大切に遣うことで、専業農家も生活が向上すると痛感した。

生活の根本は生きること、食糧に立って日本の農業をもう一度見直してほしい。減反で農家も勉強しないと荒地をもつことになる。私は農地を守る信念はいつまでも持ち続けたいと思つてゐる。私のこれからの課題は①安定したキュウリ栽培経営への努力、②脳卒中の死亡率日本一の汚名返上のための実践活動、③常に学ぶ心を失わないこと。

編集後記

今年の干支は「卯年」兎にまつわる物語は数多い。子供の頃、皆で唱ったあの歌の歌。兎追ひしあふ山、小鮒釣しあふ川。ふるさとはいいなあ。故郷への想い出は遠く懐かしい。兎のように純白で、小川のせせらぎにも似た清らかな気持ちにもう一度返りたい。青春時代、それは学園生活の想い出である。その心ふるさと我等の母校、開校以来幾多の変遷、厳しい風雪に堪え忍びつ、輝かしい歴史と伝統を守りつつ、創立八十周年を迎えることになる。これが記念事業の成功を期して関係機関一体となって創意努力中であります。

お詫び

折角お寄せ下さった貴重な原稿の中で紙面の都合上、一部割愛させて頂きましたのでご了承願います。